

体をねかしてカーブをクリアしてゆく時、初めてバイクは素晴らしい生き物に変身し、自分のモノとなるわけだ。

ましてや、バイクに乗るといことは、厳しい交通地獄の百鬼夜行の中に赤子が出てゆくようなもので、自分の肉体を危険の只中に晒すようなものだということだけは、きちんと認識していて欲しい。それも自分が無理や無茶をすればするだけ、危険が増してくる。

それだけに、自分のあらゆる感性を常に周囲に向けて路面状況や交通の流れを把握している必要がある。

簡単に云えば、馬鹿には乗れない乗り物がバイクだということだ。自然体でありながら常に万全の注意を払い、優れたドライビングテクを身につける。それが出来なければバイクに乗る資格はないのではないかと思う。

もうひとつ言いたいことは、どうせバイクに乗るなら、トコトン乗って欲しいということだ。車の方が格好いいと思うような人には乗って欲しくない。何事でも「凝りあげる」ことなしには成就しないものだと思うが、バイクも乗れば乗るほど、その良さがわかって来るものだ。冷たい風が吹く寒い冬や、視界を邪魔する雨の中は確かに辛い。しかし、そんな辛さも克服すれば楽しみに代わる。

たまにツーリングに出て若いライダーから声をかけられたりすると嬉しくなる。「何Cですか?」「六〇〇だけだ」「凄いですね」そんな何気ない会話が楽しい。

自分がやることには責任を持つ。それは社会人としての当然の義務だが、バイクに乗ることも同じで、すべての危険を自分で背負うことなしにはバイクの楽しさ、素晴らしさを味わうことはできないのだということをも十分に自覚してほしい。

そして、もう一度言いたいのだが、どうせバイクに乗るならトコトン乗って、バイクの

魅力の全てを味わい尽くして欲しいと思う。最近の若いものはものごとくに執着しないと聞く。だが、本当に好きな女性が出来たとき「別れたいの」と言われて黙って引き下がるか?もしそうだとしたら、君にはバイクはとも勧められない。バイクは楽しさと苦しきの両方を自分で背負わなければならないものだからだ。

限界を知ろう

—安全な学生生活を送るために—

広島市消防局指導課長

竹中敏幸

春になると、なぜか学生の救急患者が増えるという。人生の春まっ只中というのに、あたら尊い生命を失う者もいる。これからの学生生活を安全に過ごすためには、どんな知恵と心がけが必要なのだろうか。

解放されて春うらら

苦しかった受験をクリアし、解放感に浸っているみなさん。服装は自由。パチンコ屋にも飲み屋にも堂々と入れる。タバコを喫っても、バイクや自動車に乗っても咎められるこ

ともない。両親はおるか社会全体が、それまでの半人前扱いから、一挙に一人前扱いに変わる。しかも、経済的にも親のすねかじりとアルバイトで、自由行動がぐんと広がる。「してはいけない」という生活から、「何をしようか」という生活スタイルに変わる。ほかほか天気と相まって、解放された気分

表1 大学生等の救急搬送状況 (1991年)

傷病区分	件数(比率)
交通事故	衝突 484(46%)
	転倒・転落 135(13%)
急性アルコール中毒	109(11%)
急性腹痛	54(5%)
その他	260(25%)
総数	1,042(100%)

の学生が、今年もまた春先にどつと出現し、救急車のお世話になろうとしている。そこで安全について、ちよつと考えて欲しい。

交通事故でガシャンポキリ

昨年、当局の扱った救急患者は二二、〇〇〇人。そのうち、大学生・専門学校生は一、〇四二人で、一日平均三人である。これを傷病別にみると、交通事故による者が断然多く、五九%を占めている。全体比率が二三%である事を考えると、実に二・六倍という高率で、しかもその四分の一は骨折以上の重傷である。スピードの出し過ぎ、未熟運転等が、主たる原因である。

これまで禁止・制限されていたバイク、自動車等の運転が許され、自分の技術に見合った運転を知らないままに、どつと街に駆り出

す学生諸君の姿が、そこに思い浮かぶ。自分にとって、安全なスピードとは等、自分の運転技術の限界を知つて欲しい。

イッキイッキでピーポーピーポー

ここ四年間、春先(四〜六月)における急病学生の四割は、急性アルコール中毒である。新入部員歓迎で一杯、コンパで一杯、学園祭で一杯という具合である。ときには、可愛い女子学生までも加わり、ワイワイ集まって、イッキイッキである。

おそるおそる飲んで赤くなり、けしかけられて一気に飲んで青くなり、頭クラクラは良い方で、意識不明となってバタンキュー。その中に、女子学生も三〇%いる。どうしてよいかわからずに、店の人が一九番通報。救急車が到着すれば片隅に肩寄せ合つてオロオロしている学生諸君。青春をエンジョイさせ

表2 春先(4~6月)の急病学生数

年	総数	うちアルコール中毒者数(比率)
1988年	69	33(48%)
1989年	77	25(32%)
1990年	105	48(46%)
1991年	79	24(30%)
計	330	130(39%)

単位:人

表3 最近3年間の大学生等に起因する火災

原因別	件数
コンロの消し忘れ等	8件
タバコの不始末	6
その他	11
総数	25

る酒も度を越すと命を奪う。自分の酒量の限界を知つて欲しい。

燃えよ青春、燃やすなマイルーム

最近の学生は、ワンルームマンション等に住み、テレビ、オーディオ、冷蔵庫等ワンセットと、裕福である。

ところが火事を起こした学生に共通していることは、広島弁でいえば、ピツタレさん。瓶、缶、雑誌、紙屑は散らかし放題で、足の踏み場もない始末。灰皿代わりはあつても灰皿なし。灰皿あつても山盛り状態。肩カゴは屑の中にある。コンロの横は、発泡スチロール製の燃える食器等々、火の近くに燃えるものがあつて火事になるのは自明の理。本来の足の踏み場の半分以上が、踏場でなくなった時は、火災が起こる前兆でもある。火災予防の第一歩は整理整頓から。ここに火災を起こすかどうかの限界があることを知つて欲しい。